

平成 19 年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）

博学連携事業化報告書

2008

東北歴史博物館

平成 19 年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）

博学連携事業化報告書

2008

東北歴史博物館

ごあいさつ

本報告書は当博物館が平成 19 年度に実施した文化庁の芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）による支援を受けた、県内小学校との博学連携事業の経過と成果を記したものである。

事業の目的は、さまざまな農業活動をしている県内各小学校の学習成果をお互いに発表し合い、子供同士の交流を図る場を提供することであり、また学校と連携した博物館の積極的な活用法を探るプログラムの開発にある。

今年の交流会への参加校は多賀城市立城南小学校、白石市立深谷小学校、南三陸町立戸倉小学校の三校であった。各校では伝統的な地域産業の特色を生かした題材が設定された。

城南小学校では、「ベニバナ」「大豆」作りをテーマに栽培から収穫、染色体験までを、深谷小学校では種蒔きから、田植、除草、稲刈り、脱穀までの作業と注連縄作りなどを、戸倉小学校では身の回りの絹製品の調べから始まり、蚕の飼育から繭ができるまでの生態観察、繭の加工体験、町立のシルク館で養蚕の歴史を調べるなど首尾一貫した学習計画が組まれた。

交流会での発表は素晴らしいものであり、お互いの発表を通して他地域の歴史や産業を理解することができ、また自校の取り組みと関連づけることで新たな課題を見つけるなど、参加していただいた学校からは意義ある活動だったというご意見を頂いた。

当館では交流会に合わせて、参加校に企画展示「ちょっと昔の暮らし」の見学をして頂くことで、子供たちの学習の理解を深めることができたのではないかと考えている。また、企画展示の関連行事として開催した農作業体験にも参加して頂き、実物資料を見るだけでなく実際に使ってみることで手作業時代の苦労がわかったとたいへん好評だった。

本館としては、これからの日本を担う児童・生徒が参加し、勉強する場として、教育部門の活動内容を一層充実させていきたいと考えている。

一年間にわたる長期の事業において、宮城県古川農業試験場からは種子の提供や栽培法などについて種々ご指導とご助言を頂いた。また、子供たちを直接指導された学校関係各位、関係教育委員会、小学校PTA、東北歴史博物館ボランティアの会、東北学院大学政岡ゼミの学生諸氏には、実践の場で多大なるご協力を頂いた。関係各位に厚く感謝を申し上げたい。

平成 20 年 3 月

東北歴史博物館

館長 進藤 秋輝

目 次

ごあいさつ

1. 博学連携事業の概要	1
2. 小学校交流会	3
(1) 小学校交流会の次第	3
(2) 事業化検討会議事録	7
3. 城南小学校との博学連携事業	12
(1) 全体計画	12
(2) 事業内容	13
(3) カリキュラムづくりに向けて	17
4. 特別展「ちょっと昔の暮らし」	21
(1) 展示概要	21
(2) 学校向け指導案	23
(3) 情報募集	25
(4) 体験活動について	27

例 言

一、本書は文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）として実施した「博物館を核とした学校・地域連携事業」のうち、小学校を中心とした博学連携事業に関する実施報告書である。

一、本書には、「博物館を核とした学校・地域連携事業」には含まれない、東北歴史博物館特別展「ちょっと昔の暮らし」において実施した事業についても報告する。これは実施時期が重なっており、双方が密接に関わって事業遂行したためである。

一、本書の執筆は遠藤孝（城南小学校教諭 3 - (3)）、鈴木陽子（東北歴史博物館主任研究員 2、3 - (2)、4 - (2) (4)）、小谷竜介（東北歴史博物館学芸員 1、3 - (1)、4 - (1)、(3)）が行い、小谷が編集した。

1. 博学連携事業の概要

2007年度、当館で行った博学連携事業は（以下、本事業と記す）、文化庁「芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）」の支援のもと、小学校交流会を中心に多彩なプログラムで実施した。以下、実施した博学連携事業の全体像について、特に参加団体との関わりを中心に概観する。

本事業は大きく3つのプログラムからなる。第1に小学校交流会の開催、第2に小学校との1年間を通しての畑作体験、第3に大学との民俗調査および報告書の刊行である。この3つのプログラムはそれぞれ単独で実施しつつも、連関している。また、この関係をまとめたものが次ページの図である。更に本事業の対象外となるが、2007年10月14日より12月2日を会期に開催した特別展「ちょっと昔の暮らし」とも密接に関わり合っている。

小学校交流会は、県内複数の小学校が博物館を会場にして、学習発表会および体験学習を行う場で、本年は多賀城市立城南小学校、白石市立深谷小学校、南三陸町立戸倉小学校の3校が参加した。特別展「ちょっと昔の暮らし」にも関わり、農作業をテーマに据えて、城南小学校が畑作、深谷小学校が稲作、戸倉小学校が養蚕についてそれぞれ学習発表を行い、あまり交流することのない他の地域の子も同士の交流をはかるとともに、自分の生活する地域との違いを感じてもらうものである。交流会当日は、東北歴史博物館ボランティアの会および東北学院大学政岡ゼミの学生が体験補助として参加した。

畑作体験は、今年度城南小学校と共同で、博物館および小学校の畑を使って栽培体験、および収穫物の加工体験を行った。特に9月には、宮城県古川農業試験場より種の提供を受けるとともに、栽培の指導・助言を受けた。実際の作業・体験に際しては東北歴史博物館ボランティアの会が補助にあたり、ほぼ全ての事業に参加した。また体験活動においては、城南小学校PTA、東北学院大学政岡ゼミの学生も補助に入った。

大学との民俗調査は、南三陸町で実施した東北学院大学政岡ゼミと博物館との共同民俗調査の成果を報告書としてまとめ、調査地である南三陸町において現地報告会を開催するものである。また、調査の成果発表として特別展「ちょっと昔の暮らし」においても調査地の有形資料を展示した。これらの活動は学芸員とともに学生の参加によってなされた。更にこの事業では、調査地が交流会に参加する戸倉小学校の学区内ということもあり、現地報告会を開催することで、交流会参加小学校が博物館にて発表するのに対して、博物館側が現地で発表することになり、博物館・大学側にとっての効果とともに、児童・地元側にも一定の効果が見込まれる事業となる。学生は小学校交流会および畑作体験においても体験補助として参加するなど、全事業に関わって本事業を遂行した。

このように本事業ではここに紹介した事業を複合的に実施することで、子どもたちが通常体験できない博物館を核とした事業の実施を目指すものである。以下、本報告書では小学校との博学連携事業を中心に、事業結果について報告するものである。



Fig1-1 事業の様子
(ベニバナの摘み取り)

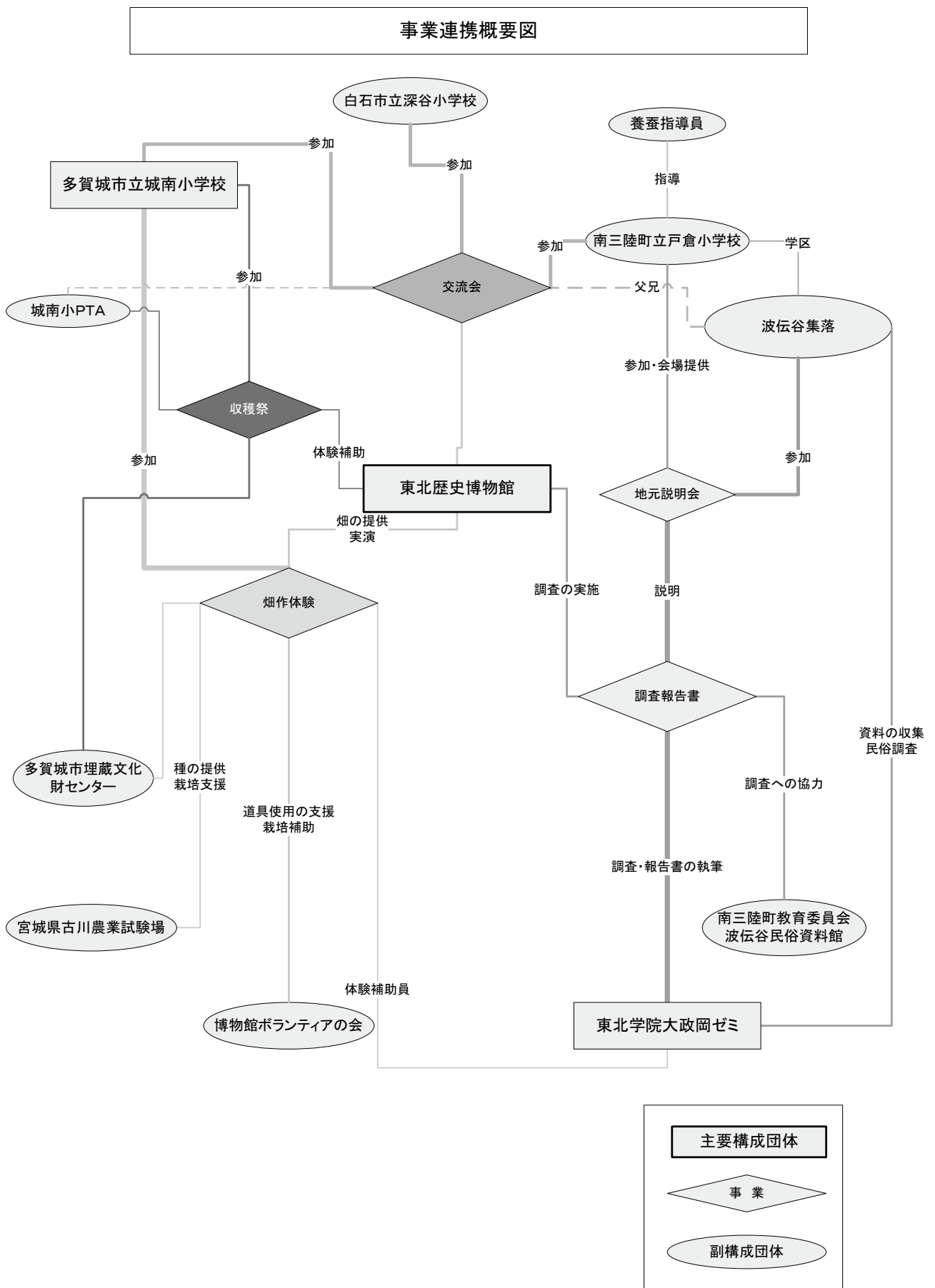


Fig 1-2 博学連携概要図

2. 小学校交流会

(1) 小学校交流会の次第

【ねらい】

- さまざまな農業体験活動をしている小学校の研究発表や農作業体験を通して、機械化以前の農業に興味・関心を持たせる。
- 展示の見学や農作業体験を通して、昔の人々は生活をよりよいものにするために工夫や努力を積み重ねてきたことに気づかせる。
- 参加する県内の小学校とその地域の住民、その地域を研究対象にしている大学、当館ボランティア等、博物館を核とする学校・地域の交流プログラムを開発する。

【日時】

平成 19 年 11 月 9 日 (金) 10:20 ~ 14:40

【場所】

東北歴史博物館講堂・古民家・エントランスホール・ピロティ

【参加校及び参加者】

多賀城市立城南小学校 4 年生 (児童 34 名 引率 3 名)
南三陸町立戸倉小学校 4 年生 (児童 23 名 引率 2 名 保護者・地域の方 7 名)
白石市立深谷小学校 3、4 年生 (児童 25 名 引率 3 名 保護者 4 名)
南三陸町教育委員会 社会教育主事 2 名
東北学院大学政岡ゼミ 学生 5 名
東北歴史博物館ボランティア 8 名

【内容】

(1) 開会行事 (10:20 ~ 10:30)

- ①開会の挨拶
- ②学校紹介

(2) 各校の研究発表 (10:30 ~ 11:40)

①多賀城市立城南小学校 4 年生

総合的な学習の時間「ベニバナからつくる」「ダイズからつくる」(博学連携事業：畑作体験)の中間発表。4月から博物館の畑を利用して農業体験に取り組んでいる。紅花の栽培では、栽培農家の方に指導を受け、6月には花の摘み取りと紅餅作りを行い、9月にクッキー作り、10月に染色体験でハンカチを紅色に染めた。大豆の栽培では、9月の収穫祭でずんだ団子を作り、12月に収穫する大豆では味噌造りを体験する予定。今までの活動を通して、子どもたちは栽培活動や加工体験の楽しさを知り、また昔の人々の工夫や苦労に気づくことができた。活動の記録は、そのつど「博学新聞」としてまとめて発行している(特別展「ちょっと昔の暮らし」会場に展示)。



Fig2-1-1 城南小学校の発表

②白石市立深谷小学校3年生

総合的な学習の時間「ほくもわたしもお米はかせ！」の中間発表。4月からPTA会長さんの指導のもと、米作りに取り組んでいる。4月の種まきと苗作りは学校で行い、5月の田植え、6月からの田の草取り、そして10月に稲刈りを行った。教室にビニルハウスを作って苗を育てたこと、余った種籾をシャーレに入れて発芽実験をしたこと、「深谷っ子アクアオリザ水田」と名付けた田んぼで土と水の様子を観察したこと、そして田植えから脱穀までの作業を実体験したことで、農家の人たちはいろいろな工夫や努力をしていることに気づくことができた。後日、ワラを使ってしめ縄作りなどをする予定。活動の記録は模造紙に貼って累積し、発表会など学習のまとめとして活用していく。



Fig2-1-2 深谷小学校の発表

③南三陸町立戸倉小学校4年生

総合的な学習の時間「お蚕様のひみつをさぐろう」の中間発表。養蚕に詳しい地域の方の指導のもと、蚕の飼育に取り組んだ。できあがった繭は、絹糸取りや染色してマスコットに加工した。4月は身の回りにある絹製品調べを行い、地域の方に蚕の生態や飼育方法を教えてもらい、6月からは飼育・観察を通して蚕の生態や一生を調べ、9月には繭の加工体験を行った。また10月には町内の社会教育施設であるシルク館に行って南三陸町の養蚕の歴史を調べてまとめた。以上の学習を通して、蚕や繭のひみつを知ることができ、また地域の産業だった養蚕の歴史を調べ、養蚕体験をすることで自分たちが住んでいる地域を大切にしようとする心を育てた。12月には3年生を迎えて発表会を行い、今までの活動を引き継ぐ予定である。



Fig2-1-3 戸倉小学校の発表

④発表についての質問・意見

※閉会行事の感想発表に入れる。

⑤研究発表の講評



Fig2-1-4 発表会場の様子



Fig2-1-5 農作業体験



Fig2-1-6 きなこ作り体験



Fig2-1-7 染色体験



Fig2-1-8 繭マスコット作り体験



Fig2-1-9 繭掻き実演

(3) 体験教室 (11:40 ~ 12:40)

当館のエントランスホールなど各会場において、参加校が持参した収穫物を昔の道具を使って加工する体験を行った。染色体験や繭マスコット作りなど子どもたちが運営するコーナーや、農作業体験やきなこ作りなど当館のボランティアと東北学院大学の学生たちが担当するコーナーでは、初めての体験に真剣に取り組む子どもたちの姿があった。

①農作業体験 担当：ボランティア、東北学院大生

千歯こき・打ち棒・篩・木臼・横杵・箕・石臼など昔の道具を使って脱穀から精米、米粉作りの仕事を体験した。昔の道具を使いこなすにはコツと体力が必要で、特に重い横杵と、思うように籾殻が飛ばせない箕には、だいぶ苦戦していたようだった。

②きなこ作り体験 担当：ボランティア、東北学院大生

石臼を使ってきなこを作る体験をした。大豆はフライパンで煎ったものを使うが、1回挽いただけでは粉状にならないので3回ほど繰り返し挽いた。できたきなこは農作業体験で作った米粉を使って団子にしたものから「きなこ団子」にして参加者全員が味わったが、市販のものとは違う食感や風味を楽しむことができ、大満足の子どもたちだった。

③染色体験 担当：城南小学校、ボランティア、東北学院大生

畑作体験で収穫・加工した乱花と紅餅を使って染め液を作り、絵を描いた紙をそれに浸してしおりを作る体験をした。好きな絵や模様を描いてオリジナルな作品ができること、できあがった作品は本などに挿して利用できることから、多くの子どもたちが参加していた。担当した城南小学校の子どもたちも楽しそうに活動していた。

④繭マスコット作り体験 担当：戸倉小学校

繭染めした繭をチューリップの形に切り、底に紐を通してできるマスコット作りを体験した。戸倉小学校の子どもたちが、自分たちが体験したことを生かして、他校の友達に丁寧に教えていた。同行した地域の方にも指導していただき大盛況だった。戸倉小学校では、作った繭マスコットを交通安全運動に利用している。

⑤繭掻き実演 担当：戸倉小学校

「まぶし」に乾繭した繭を差し込んで、繭を掻き出す前のまぶしの様子を再現したもの。また押し棒で掻き出す様子を実演して見せた。町の教育委員会の方に専用の機械を持ち込んでいただき、めったにできない体験ができたこと評判だった。

(4) 昼食・休憩 (12:40 ~ 13:30)

(5) 館内の見学 (13:30 ~ 14:20)

午後は、特別展「ちょっと昔の暮らし」の見学、常設展の見学、こども歴史館の体験などを楽しんだ。特別展では、展示されている資料の名前や使用方をメモしたり、クイズに答えたりして熱心に見学していた。この時間は自由見学だったので、子どもたちは積極的に他校の子どもたちと交流していた。また特別展示室では、東北学院大学の学生から詳しい説明を受ける場面も見られた。



Fig2-1-10 館内見学の様子

(6) 閉会行事 (14:20 ~ 14:30)

①感想発表

3校の代表の子どもたちが、小学校交流会の感想を発表した。

以下は、その主な内容である。

- 他校と一緒に発表会や体験の活動ができてよい思い出になった。またやってみてみたい。
- 大きなステージでの発表でプレッシャーがあったが、いい演技ができてよかった。
- いろんなものを見たり、やったりして楽しかった。またこのような機会があったらいい。
- 博物館での勉強が大好きだ。いつも楽しみにしている。これからやるしめ縄や味噌造り体験がとても楽しみだ。

また、体験教室で指導や活動の補助をしていただいた当館ボランティアと東北学院大学の学生の代表からは、参加校が堂々と発表していて驚いた等の感想が寄せられた。



Fig2-1-11 児童の感想発表

②挨拶

※終了後に全員で記念撮影



Fig2-1-12 ボランティアの感想



Fig2-1-14 記念写真



Fig2-1-13 学生の感想

(2) 事業化検討会議事録

【日時】

平成 19 年 11 月 29 日（木）13：30～16：00

【会場】

東北歴史博物館大会議室

【出席者】

多賀城市立城南小学校	教諭	遠藤 孝	（小学校交流会参加）
白石市立深谷小学校	教諭	奥平真由美	（〃）
南三陸町立戸倉小学校	教諭	鈴木憲太郎	（〃）
仙台市立柞江小学校	教諭	布施勝久	
南三陸町教育委員会	社教主事	大森隆市	（小学校交流会参加）
東北歴史博物館	館長	進藤秋輝	
	主任研究員	鈴木陽子	
	副主任研究員	市村賢則	
	副主任研究員	水沼節郎	
	副主任研究員	高橋栄一	
	研究員	政次 浩	
	学芸員	小谷竜介	

【内容】

(1) 開会行事

- ①開会の挨拶
- ②出席者の紹介

(2) 小学校交流会の報告と意見交換

①小学校交流会の報告

小谷：小学校交流会は、遠隔地であるために普段は交流できない学校同士が子どもたちの情報交換の場として、また博物館の展示・体験施設等を使って様々な体験をしてもらう場として企画したものである。当館の古民家の畑を利用した畑作体験を行っている地元の城南小学校、大学と連携して行った民俗調査の対象地である南三陸町戸倉地区にある戸倉小学校、県南の内陸部で農業体験活動を行っている白石市の深谷小学校の計3校に参加していただいた。

鈴木（陽）：昨年度10月に交流会の企画検討を行い、特別展「ちょっと昔の暮らし」の関連事業として開催することになった。参加校を決定後、11月に各小学校を訪問し事業の説明と参加の協力を依頼。白石市内の小学校については、農業体験活動の実施状況調査を行い、その結果を基に参加募集をした。昨年度の交流会では企画の検討が遅れたために参加校が少なかったため、今回は各小学校の次年度カリキュラム作成時期を考慮した前年度10月の検討となった。19年3月になって、本事業を特別展「ちょっと昔の暮らし」の関連事業から分離し、芸術拠点形成事業とし



Fig2-2-1 会場の様子

での開催をめざし文化庁に申請、6月には内諾通知を受け、7月契約に至った。交流会までは担当の先生方との情報交換の中で活動に必要なものを支援し、11月に今回の交流会及び交流会事業化検討会を開催した。今年度末には交流会事業化報告書を作成、県内の小学校や市町村教育委員会などの各関係機関に発送する予定で、今回の事業が県内の教育・生涯学習機関に周知されることを期待している。

※ビデオで交流会の様子を視聴する

②小学校交流会の感想

遠藤：テーマが農業体験だったので参加できた。博物館の声かけに感謝している。城南小にとって交流会は博学連携事業の中間まとめのような位置付けで、自分たちのやってきたことを一度振り返り、今後の活動を見直すいい機会だった。城南小は畑も経験もなくゼロの状態から始めたので、活動を積み重ねてきた他校のような立派な発表とはいかず活動報告に留まった。当日は研究発表、体験教室、特別展の見学と日程が詰まっていた、私も児童も分刻みで動かなければならなかった。

奥平：毎年、3年生が稲作体験に取り組んでいるが、今年は交流会に向けて保護者等の協力を得、より入り込んで活動を進めてきた。他校のように博物館や大学生との事前交流はなかったが、当日は自分なりのめあてを持って臨んだ。昔の農具を使っての農作業体験は普段できない貴重な体験だったし、特別展では多くの農具とクイズの企画があって集中して取り組むことができた。また他校の子どもたちと心の面の交流もあり収穫だった。最後に、各校の研究発表に対して感想や意見を述べ合う時間があれば、新たな課題を見つけてさらに活動を深められたと思う。いい経験をさせてもらい感謝している。

鈴木（憲）：本校では今年度、学芸会を学習発表会と名称変更したこともあり、4年生は総合的な学習の時間の発表として今回の交流会の内容を20分にまとめ上げるという計画を立てて取り組むこととした。子どもたちからは、「他校がやっている体験をやってみたい」「立派なステージで発表して緊張した」などの感想が聞かれた。当日は発表の準備に時間がかかり、また体験教室の子どもの動きが読めなかったため十分な体験ができず残念だった。特別展は地元が取り上げられたので興味を持って見ることができ、帰校後に展示内容と関連する調べ学習をした子がいた。

大森：南三陸町では、戸倉小の総合学習の補助事業として学社融合連携を行っている。先生方には学校での本分を勤めていただき、地域とか学校以外のことは教育委員会がサポートしている。今回の交流会も博物館から話があったときから私たち教委が間に入って参加したわけである。感想を言わせていただくと、発表会場が大きいと子どもたちが身構えてしまうので、この会場（大会議室）のような大きさがいいのではないか。今回は精鋭の子どもたちが集まったようで、講堂のような大きな会場でも各学校とも堂々とした発表ができていた。

鈴木（陽）：当日、体験教室補助として参加した8名の当館ボランティアの方からは、「研究発表からどの学校も十分に成果が出せたと思う」「参加校が遠隔地から来ているので時間的に制約があったが、子どもたちにも

自分たちにもよい機会だった。来年以降の開催も期待している」などの感想が寄せられた。

小谷：今回参加した学生は民俗学ゼミの学生で、小中高の教員や学芸員を志望している。彼らからは、「自分にもこのような機会があったらよかった」「交流の時間や場面が少なかった」「諸々の面で学芸員がもっと前面に出るべきでは」などの感想や意見が寄せられた。今回は、学校・地域間の交流であり、小学生はもちろんだが、学生やボランティアなど広い世代間の交流を意図していたので、彼らを意図的に前面に立たせたわけである。最後に、自分たちが研究している地域の人たち（戸倉小の参加者）との交流をもう少し意識してもらいたかった。

③小学校交流会の成果

小谷：博物館は宮城県内の地域毎の歴史や文化の違いを展示や研究で表現することが仕事だが、今回の交流を通して子どもたちや保護者、地域の方にその違いを知ってもらった一つのきっかけとなったのならそれが成果であろう。

遠藤：積極的に声をかけて他校の友達をつくることがよかった。特別展で見た養蚕の道具が戸倉小の発表と結びついて理解できたこと、深谷小の米栽培の発表を聞いて自分たちも興味関心が持てたことなどがよかった。今回の交流会も含めて、博学連携事業に参加するにあたっては総合的な学習の時間のカリキュラムを全面的に変更したわけだが、社会科では宮城県の学習単元で気仙沼を南三陸に、蔵王を白石に組み替えることで今回の交流会の発表と結び付けられ学習がより深められるものと考えている。

奥平：戸倉小の研究発表を見て地域（南三陸町）がわかったこと、城南小の子どもたちからは積極的に声をかけてもらったことなど交流会は成果があった。社会科の学習時に戸倉小や城南小との交流を生かしていきたい。また稲作活動の発展として、城南小でやっていたワラの加工体験などを考えていきたい。

鈴木（憲）：城南小に戸倉小から転校した子がおり、その子を通して交流が深まった。また、体験など実際にやってみるとということがよかった。

布施：柊江小学校近辺は瓦窯が多く（多賀城Ⅲ期の瓦が作られた）、その関連で仙台市博物館からパネル展示の依頼もあったが、子どもたちにはその時代認識がなく、私が瓦についての授業をやった経験がある。今回の3校の20分の発表の準備は大変だったと思う。博物館は「気づき」の場を提供するところだし、自分の経験から博物館のわかりやすい展示と楽しい体験がつながることが大事だと思う。

④博学連携事業畑作体験について

遠藤：昨年度の校内研修で「博物館をどうやって利用するか」というテーマを取り上げたところ、今回の博物館からの誘いがあった。ただ当時は次年度の行事予定がすでに決まっており、カリキュラム・予算・畑作の場所などの検討材料が多かった。大豆と紅花の栽培・加工の取り組みについては、戸倉小が養蚕体験、深谷小が米栽培だったので、生糸を染める

染料として紅花を、米に対しては味噌・豆腐・きなこの原料となる大豆を、という発想だった。私自身が知識も経験もないので、紅花農家などの専門家や博物館の職員に指導をいただいて子どもたちと共に学んできた。また博物館のボランティアさんにも支えてもらった。次年度以降も博学連携の活動は続けていきたい。

小谷：城南小の畑作体験は、博物館の教育普及事業としてこれから開催する体験教室等の企画において新たな素材収集の場となった。



Fig2-2-2 議論の様子

(3) 小学校交流会の事業化について

小谷：感想や意見から今回の交流会について成果をいただいたと受け止めている。交流会だけであれば博物館でやる必要性はなかったが、展示と発表がリンクして成果が上がったという点で参加した児童にとっても博物館にとってもよかった。県施設としては地域理解がリアルなものとして捉えられた点がよかった。事業化の可能性について技術的な側面、時期、連絡内容、当日の流れなどについて話を進めていきたい。まずテーマについてお考えを出していただきたい。

遠藤：特別展があるから、それに併せて交流会をやるというイメージがある。毎年この時期にこのような展示があるのなら、それに沿ったテーマでやると展示とリンクして意味がある。

鈴木（陽）：特別展があるからというのは、企画者の考えもあって保証はできないと思う。常設展を使い、歴史系であれば6年生がどうか。また食育と絡めるのもどうか。

政次：常設展は旧石器から近現代まであるので、学校で特化したテーマでやるのは難しいのではないか。今回のようにテーマに沿った形でできる方がよい。また学校側でこれをやりたい、児童の希望はこうだ、こんな時期にやりたいなどがあれば、逆にそれを展示に反映させることも可能か。

小谷：それは募集方法、開催時期などに関わってくると思う。学校が計画を立てるスパンと、博物館で最低2・3年前から展示を計画するスパンの違いもある。

奥平：歴史系や農業については魅力がある。身近な地域の歴史を掘り下げられるもの、博物館でしかできないものがよい。

政次：博物館としては、地域の歴史学習の手伝いができると思う。

布施：仙台市博物館には貸し出し資料が多いが活用法がわからないというので、活用パンフを作ったり、子ども向けにキャプションの工夫などをしてきた。今回驚いたのは、博物館が展示と体験を組み込んだ指導案を作成したことだ。ああいうことが大事である。

鈴木（憲）：今回の交流会は参加が3校というところに意味があった。城南小が紅花や大豆について他の2校と結び付ける努力をしていたことに感激した。戸倉小としては、テーマは何でもよかった。体験が展示に結び付けばベストだが、博物館に集まって発表・交流ができる機会を得られたことがよかった。

鈴木（陽）：参加したい学校に集ってもらい、手を上げてもらってテーマを決めるというのはどうか。

大森：今回については、設定テーマがまずあり、学芸員が根回ししたからで

きたこと。戸倉小は、町教委が肩を押してやった感じだった。交流会が定着すればやりたい学校が集まってくるだろうが、学校関係者に博物館に来てもらうなどして、交流会が総合学習の発表の場としてふさわしいということをもっとアピールすればいいと思う。

鈴木（陽）：参加の募集の時期についてはいつがいいか。

大森：交流会への参加については、教委・文化財保護課にお願いしていい。時期については早ければ早いほどよく、次年度の町や学校のいろいろな事業が動き始める9～10月頃がどうか。

鈴木（陽）：開催時期についてはどうか。

鈴木（憲）：総合学習が進んでいないので夏休みは無理だろう。

奥平：11月だと総合学習は中間発表的なものになる。1～2月なら最終発表になる。

鈴木（憲）：発表会場についてはどうなのか。今回は会場がイメージできなかった。

小谷：今回は3校が参加ということで、収容人数の多い講堂となった。会場は内容や参加校数にもよるが、ポスターセッションのようなものならエントランスホールや中央ロビーなど別の会場も考えられる。

遠藤：一般のお客さんがいることになるが、参加児童が発表者に直接質問もできるからそれもいいのではないか。

鈴木（陽）：今回の交流会の会場や発表会の在り方、体験教室の内容等については、先生方をはじめ参加者からいくつかの問題点を上げていただいたが、事前検討会を設定すればよかったと改めて思った。

鈴木（憲）：体験教室については、他校がコーナーを出すことを聞いていたが、本校では繭玉を使って何ができるのかずいぶん考えた。また小規模校なので体験時のグループ分けも難しかったし、館内の様子もわからず不安があった。事前検討会は欠かせないと思う。

小谷：先生方に負担をかけないように、当日来てもらうだけでいいと考えていたが、事前検討会は必要だったかもしれない。最後に、本日の交流会事業化検討会についてはどうだったか。

遠藤：私は近いからよいが、遠隔地の深谷小と戸倉小の先生はどうか。

小谷：今までの話をまとめると、各学校で可能ならば、交流会当日だけでなく、事前事後の検討会があればよいということか。

先生方全員：それでよいと思う。

鈴木（陽）：本日は小学校交流会について貴重なご意見や感想をいただいた。博物館として学校の期待に応えられるような企画を考えていきたいと思う。ありがとうございました。

3. 城南小学校との博学連携事業

(1) 全体計画

城南小学校との連携事業は、同校4学年の1クラス(33名)を対象に小学校交流会のほか畑作体験として、当館今野家住宅付属の畑および城南小学校敷地内の畑を使って行った。その内容は作物の栽培、育成、収穫、加工までの一連の作業を体験するものである。

栽培作物は栽培期間や収穫時期、加工の体験内容を鑑みて紅花と大豆を選択した。紅花は染料のもととなる紅餅作りと染色体験を目標に作業を進めた。大豆は石臼を使ったきなこ作りと味噌造りを目標に作業を進めた。

事業期間中、9月に「収穫祭」として、枝豆段階の豆を収穫してずんだ団子およびきなこ団子への加工体験をイベント形式で開催したほか、七夕馬づくりなど、博物館側で既に実施している体験プログラムからいくつかの体験を季節に合わせた行事として実施し、1年間を通しての連携事業とした。

下表のように、月に1、2回程度、博物館および小学校を使用して活動を行った。また、その結果は、城南小学校側が「博学新聞」として壁新聞を作成し、学校での掲示後、博物館エントランスホールにて掲示した。また、博物館側では、活動内容をweb化し、本館ホームページにて公開した⁽¹⁾。

(1)http://www.thm.pref.miyagi.jp/special/special_h19/h19_4_mukashi/hatasakutaiken/hatasaku_index.html

Tbl3-1-1 城南小学校との連携事業

日	事業内容	会場	摘要
3月29日	紅花の種まき(第1回)	東北歴史博物館	職員とボランティアによる事前作業
4月17日	紅花の種まき(第2回)	城南小学校	初めての共同作業
4月26日	紅花の間引き(第1回)	東北歴史博物館	5cm間隔への間引き
4月27日	紅花の種まき(第3回)	城南小学校	多賀城市花壇への種まき
5月15日	大豆の土作り	東北歴史博物館	畑への肥料入れ、畝作り
5月29日	紅花の間引きと大豆の種まき	東北歴史博物館	10cm間隔への間引きと大豆の種まき
6月20日	大豆の種まき	城南小学校	9月に枝豆を収穫するために1月遅れでの種まき。学年行事。
6月28日	七夕馬づくり	城南小学校	体験活動(1)
7月11,12日	紅餅作り	東北歴史博物館	体験活動(2)、1日寝かした紅花を乾燥させるまでの作業を行う。
9月25日	大豆の収穫祭	城南小学校	当初の予定日が台風により休校になったため、規模を縮小して開催。
10月25日	紅花染め	東北歴史博物館	30cm角の木綿布での染色体験
11月9日	小学校交流会	東北歴史博物館	
12月7日	大豆の収穫	東北歴史博物館	予定より1月遅れでの収穫作業
12月18日	しめ縄作りと大豆の脱穀	東北歴史博物館	体験活動(3)と穀打ち台を使っての脱穀体験
1月22日	味噌作り(1回目)	東北歴史博物館	味噌玉作りまでを体験
2月7日	味噌作り(2回目)	東北歴史博物館	味噌の仕込みを体験

(2) 事業内容

【紅花の栽培と加工体験】

博物館の今野家住宅の畑と城南小学校の花壇で紅花を栽培した。当館でも紅花の栽培は初めてだったので、山形市の紅花栽培農家の方に助言をいただきながら進めた。途中なかなか思うように成長せず心配したが、予定通り7月の収穫期を迎えることができた。収穫した紅花は、紅餅と乱花に加工し、紅餅は染色体験に、乱花はクッキーやずんだ団子作りの材料に活用した。



Fig3-2-1 紅花の間引き

間引き

平成19年4月26日

本葉が2～3枚になったので、ハサミを使って慎重に間引きをしました。元気のよいものを残しましたが、間引いた葉はおひたしや味噌汁の具などにできると聞いて、さっそく家に持って帰って食べた子もいたようです。後日本葉が6～7枚になったら2回目の間引きをして、株の間隔を10cmくらいにします。



Fig3-2-2 土寄せ

土寄せ

平成19年5月29日

茎が20～30cmになったので、うね間の土を株元に盛り上げる土寄せの作業をしました。ボランティアの方に鍬の使い方を教わりながら、交代でしました。鍬の刃は危ないので、周りをよく見て作業を進めました。この後、茎が倒れないように支柱を立てて成長を観察します。

紅花の収穫

平成19年7月11日

山形市から紅花栽培農家の方を招いて、紅花の収穫と紅餅作りの指導をしていただきました。あいにくの雨模様でしたが、とげに気を付けながらたくさんの花を摘み取ることができました。今回収穫したものは紅餅用にして、乱花用は後日の晴れた日に収穫・加工する予定です。



Fig3-2-3 紅花の収穫

紅餅作り ※体験活動(2)

平成19年7月11日～12日

2日間にわたり紅餅作りを体験しました。収穫した紅花をよく水洗いした後で水にさらし、臼に入れて交代でつきました。一晩寝かせた紅花が真っ赤に変色していたのにはびっくり。後は小さく丸めたものを筥で踏んでせんべい状態にし、自然乾燥で紅餅のできあがりです。1週間後には残りの花も摘み取り、2回目の紅餅作りを行い、合わせて染色体験2回分の紅餅ができました。



Fig3-2-4 紅餅作り

クッキー作り

平成19年9月21日～22日

クッキー作りも2日間の体験でした。1日目は、生地作りです。紅花の染め液を混ぜると、橙色に染まりました。2日目は楽しい型抜きです。思い思いの形を作り、紅花の種を飾って焼き上げました。できあがったクッキーはとっても甘くておいしいと評判でした。



Fig3-2-6 クッキー作り

染色体験

平成19年10月25日

灰汁水の上澄み液に、夏に作った紅餅を入れて染め液を作りました。割り箸や輪ゴムを使って縛った布を、酢を入れた染め液につけ込んで20分。水洗いした布を薄い酢水につけるとみるみる赤紫色に変わりました。最後に水洗いした布をしぼってアイロンがけすると、模様もくっきり浮かび上がり、すてきなハンカチになりました。



Fig3-2-7 染色体験

【大豆の栽培と加工体験】

今野家住宅と城南小学校の畑で大豆を栽培した。今回は、城南小学校4年生全員の栽培活動として9月の収穫祭をめざして取り組んだが、収穫祭当日は台風の影響で休校になり、日程を変更したクラス毎のミニ収穫祭になってしまった。しかし、PTAや当館ボランティアの方の協力で枝豆を使ってずんだ団子などを作り、食べることができた。12月に収穫した大豆は登米市の農産物加工クラブを運営している方を講師に招いて行った味噌造り体験に活用した。

土作り

平成19年5月15日

今野家住宅の畑はすでに耕してあるので、今回は鍬を使って溝を掘って肥料を入れる作業をしました。初めにボランティアさんから鍬の使い方を教わりました。鍬は掘るだけでなく、ならすこともできると聞き、横の平らな部分も使えるように練習しました。そして一週間後に大豆をまきました。



Fig3-2-8 大豆の土作り

種まき

平成19年6月20日

城南小学校の畑に4年生の1～3組の子どもたちが大豆をまきました。クラス毎の活動でしたが、ボランティアさんの話をよく聞いて鍬を使ったり、種をまいたりしました。間引きや水かけなどこれからの栽培のポイントを教わり、9月の収穫祭を目標に世話を続けます。



Fig3-2-9 種まき

間引きと土寄せ

平成19年7月19日

4月から始めた紅花の栽培で間引きの意味や方法を知ることができたので、今回は作業がスムーズに進みました。問題は土寄せです。うねの向こう側の土を持ってくるのに、なかなか上手に鍬を使うことができません。ボランティアさんに手をとってもらった子もいました。8月に入ると葉や莖が勢いよく生長しました。



Fig3-2-10 間引きと土寄せ



Fig3-2-11 収穫祭

収穫祭（ずんだ団子作り）

平成19年9月25日

今野家の畑で収穫した枝豆を煮て、ずんだ餡作りをしました。すり鉢とすりこぎを使うのが初めての子もいましたが、みんなで協力して作業を進めていました。事前に石臼で作っておいたきなこも使って、紅花入りの団子に絡めると2色団子の完成です。2つの味を楽しむことができました。



Fig3-2-12 豆打ち

大豆の収穫と豆打ち

平成19年12月7日～18日

12月に入りようやく収穫作業を行うことができました。収穫した大豆は吊して乾燥させた後、今野家の庭で脱穀作業をしました。学芸員の手作りの穀打ち台を使ってカゴいっぱい的大豆を集めました。中には勢い余って大豆が飛び散ってしまい、拾う方に時間を取られる子もいました。



Fig3-2-13 味噌作り（豆踏み）

味噌作り①

平成20年1月22日

登米市から味噌造りをしている方を招いて、昔の方法で味噌造りを指導していただきました。大豆を大鍋で煮て柔らかくしたものを、半切という大きな桶に入れて足で踏み潰します（本来はミソフミズンベをはいて行う）。それを10cmの立方体（味噌玉）にし、今野家の軒下に吊して発酵するのを待ちます。



Fig3-2-14 味噌作り（麴混ぜ）

味噌作り②

平成20年2月7日

発酵を終えた味噌玉を水につけて柔らかくした後、麴と塩を混ぜ合わせて樽に仕込みました。あとはじっくり寝かせておいしい手作り味噌の完成です。1年後には開けてみる予定にしていますが、試食とお持ち帰りが楽しみです。今年度の博学連携事業の最後の活動となりました。



Fig3-2-16 大豆の刈り取り

【体験活動】

紅花と大豆の加工体験とは別に、博物館で既に実施している体験プログラムから鉦端馬づくりとしめ縄作りを行った。

七夕馬づくり ※体験活動 (1)

平成19年6月28日

七夕馬は、旧暦の7月6日、新暦の8月6日前後に、県内各地で家毎に作られたもので、盆行事の一つです。今回は、城南小学校の図工室で行いました。子どもたちはワラ細工が初めてということでなかなか思うように作業が進みませんでした。胴体ができあがるとその後は笑顔も見られ、2頭目の馬を作る子どもでできました。できあがった馬は、各自で家に持ち帰って飾ったそうです。



Fig3-2-17 「頭の部分は丸くできたかな？」学芸員の指導で作業が進みます



Fig3-2-18 ボランティアさんに足の付け方を教わる子どもたち



Fig3-2-19 完成した七夕馬

しめ縄作り ※体験活動 (3)

平成19年12月18日

ワラ細工は2回目の子どもたち。お正月に向けてのしめ縄作りは、博物館の研修室で行いました。特別展「ちょっと昔の暮らし」の関連行事として実施した農作業体験(3-(4)参照)ででたワラを使って、今野家のしめ縄「輪どおし」を作りました。初めての縄ないに悪戦苦闘の様子でしたが、ボランティアさんに教えてもらって練習を繰り返すうち上手にできるようになり、2つずつ家に持ち帰りました。



Fig3-2-20 学芸員のない方をみんな熱心に見ています



Fig3-2-21 ボランティアさんは縄ないの達人!

(3) カリキュラムづくりに向けて

今年度（19年度）からスタートした東北歴史博物館と多賀城市立城南小学校の連携事業。この事業を始めるに当たり、最初にやらなければならなかったのが「カリキュラムづくり」である。

栽培・加工活動を中心としたカリキュラムを4年生用に新たに作る場所からこの事業はスタートした。しかも、これから作るカリキュラムは、1学級のための1年間に限ったものである。

1. 時数の確保

(1) 総合的な学習の時間から

活動時数を確保するためにまず注目したのが「総合的な学習の時間」であった。毎年内容を変更できる領域だからである。本校の第4学年の総合的な学習は、「学校総合」「学年総合」「学級総合」の3つの柱で構成されている。それぞれの時数、テーマについては下記のようになる。

Tbl3-3-1 総合的な学習の時間のテーマ

種別	時数	テーマ
学校総合	37	若草12、城南10、国際理解10、福祉5
学年総合	58	環境、コンピュータ 等
学級総合	10	学級独自

学校総合枠は、城南小学校の児童として必ず取り組まなければならないテーマであり、この部分を変更することはできない。つまり、総時数105時間ある中から、「博学連携事業」として取り組むことができる時数は、学年総合58時間と学級総合の10時間の計68時間が上限である。



Fig3-3-1 教室にて作業をする子どもたち



Fig3-3-2 「博学新聞」
（特別展示室にて）

(2) 他教科との関連から

総合的な学習の時間の「学年総合」「学級総合」の68時間だけでは、この事業において必要な活動のための十分な時数を確保することができない。そこで、関連すると思われる教科・単元も組み入れ、合科的に取り組むことにした。教科、単元名、時数は下表の通りである。

Tbl3-3-2 他教科からの流用

①国語科

月	単元名	取扱時数	活用時数
5月	「お礼の手紙を書こう」	4時間	3時間
7月	「自分新聞を作ろう」	4時間	4時間
12月	「活動ほう告を書こう」	13時間	10時間
		計	17時間

②社会科

月	単元名	取扱時数	活用時数
9月	「古い道具と昔の暮らし」	7時間	7時間
10月	「残したいもの、伝えたいもの」	6時間	6時間
1月	「山地の暮らし（白石市）」	4時間	4時間
2月	「海べの暮らし（南三陸町）」	4時間	4時間
		計	21時間

③図工科

月	単元名	取扱時数	活用時数
9月	「ずっと友達だよ」	4時間	4時間
1月	「思いを色系につないで」	4時間	4時間
		計	8時間

上の表から国語科、社会科、図工科の各単元と事業の内容から関連が図られる時数の合計は、46時間となる。

以上のことから、総合的な学習の時間と各教科との関連から生み出された時数の総計は114時間で、この時数内で19年度の博学連携事業を進めていくことになる。

Tbl3-3-3 単元構成

第1単元 ベニバナからつくる				40時間
①ベニバナって？	5時間	4月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表	
②ベニバナを栽培しよう	28時間	4月 5～7月 7月 7月	・畑の耕し、畝作り、播種 ・除草、間引き、フラワーネット張り ・花摘み（収穫） ・紅餅づくり	
③ベニバナで染めよう	7時間	10月	・布の染色体験（2回） ・紙の染色体験（しおり作り）	
第2単元 ダイズからつくる				42時間
①ダイズからできるもの	4時間	5月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表	
②ダイズを栽培しよう	20時間	5月 6～7月 9月 11月 12月	・畑の耕し、畝作り、播種 ・除草 ・除虫 ・収穫 ・脱穀	
③団子づくり	6時間	9月 10月	・黄粉づくり ・団子づくり	
④味噌づくりをしよう	9時間	1月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表 ・味噌玉づくり ・味噌の仕込み	
⑤豆まきをしよう	3時間	2月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表 ・今野家住宅での豆まき	
第3単元 ワラからつくる				8時間
①七夕馬って何？	4時間	6月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表 ・七夕馬づくり	
②しめ縄づくりをしよう	4時間	12月	・図書室の本やインターネットでの調査 ・発見したことなどの発表 ・しめ縄づくり	
第4単元 友達になろう				14時間
①交流会をしよう	14時間	10月 11月	・活動の振り返り ・活動写真の選択 ・発表原稿の作成 ・発表の練習 ・「山地のくらし（白石市）」 ・「海べのくらし（南三陸町）」 ・交流会	
第5単元 活動を振り返ろう				10時間
①博学文集をつくらう	10時間	1～2月	・文集の形式について話し合う ・原稿執筆 ・製本	

(3) 単元構成について

確保された114時間の活動時数で、栽培することが決まっている「ベニバナ」と「ダイズ」の栽培・加工を中心に単元を前ページのように構成した。全5単元で、総時数114時間の構成となる。

(4) 実践してみたの感想（カリキュラム編成に関わって）

今年度からスタートした「博学連携事業」。何もないところからのスタートであったこと、準備期間が短かったことなどもあり、内容的にも決して充実しているとは言い難い。とにかく「やらなければならないこと」を拾い上げ、組み立てただけに他ならない。

また、19年度においては4年4組が単独で取り組む形となったために、計画立案から渉外、予算、畑の確保（学校分）など、全て一人で行わなければならなかった。そうした事情もあり、「やりたい」「やってみたい」ことはたくさんあったが、現実問題として「これくらいならやれる」といった内容・規模となってしまったことが反省点として挙げられる。次年度は、今年度の反省を生かし、その上に実践するわけであるから、より内容を充実させた活動となるであろう。

次年度の博学連携事業の実施に当たりカリキュラム上、以下のような問題点が考えられる。

①新たなカリキュラムの作成が必要（毎年更新）

担当者が変われば考えも変わる。当然カリキュラムも次年度は大幅に変更されるものとする。毎年新たな計画を立案することはかなりの負担を感じる。一部でもいいので今年度のカリキュラムを活用する方法を検討すべきである。

②学級だけでも活動できる内容であること

1学級単独で実施するために、全てを一人の担任で行わなければならない。日常の学習指導プラス連携事業となるとかなり負担感があるのは否めない。担任一人でも無理なく実施できる内容とし、渉外担当として他の職員の協力を得るなどして、博物館側に頼りすぎず、自校でも実施できるようにしていきたい。

③学年として活動できるカリキュラムも準備

次年度も「1学級での実践」ということを全職員で確認している。しかし、同学年の職員からは、「大変そうだけど博物館との連携事業はやりたいという声が見学からも保護者からもある」という意見が出た。

今年度は「大豆」の単元において学年で取り組んだ部分もあり、おおむね好評であった。また学年PTA行事として「収穫祭」も計画した（台風のため中止となったが）経緯もある。次年度の途中においても、学年全体で活動できるように変更可能な計画をしておきたいと考えている。

4. 特別展「ちょっと昔の暮らし」



Fig4-1-1 会場入り口



Fig4-1-2 展示風景

(1) 展示概要

特別展「ちょっと昔の暮らし」(2007年10月12日～12月2日)は、昭和30年代から昭和40年代に使われていた生業用具、生活用具を中心として構成された展示である。この展示では、現在につながりつつも、現在ではあまり見ることのできない道具について、特に地域性と、改良を中心とした変遷を示すように意識して構成した。このような時期の資料を展示することから、展示の直接の対象としては祖父母と子供たちが一緒に見て、話ができるように来館者層を設定し、かつ小学校中学年の子供たちが資料に対して興味を持つように、展示室内外でいくつかの仕掛けを試みた。

展示では3つのコーナーを設けた。「ある家の暮らし」「農業の道具」「手作りの道具」である。各コーナー間には直接の関係は持たせず、好きなコーナーから展示を見られるようにした(次頁図参照)。ただし、資料間ではその関係をもてるようにして、キャプションにその旨を記した。

まず、「ある家の暮らし」は本館民俗部門が2005年度より実施した南三陸町における民俗調査の成果を展示する方針の下、同地の1軒の家に残された生活用具を借用し構成した。南三陸町の沿岸部は漁村のイメージが強いが、実際に調査をしてみると漁業のみならず、農業、特に養蚕業や炭焼きなどの林業にも力をいれていることが判明し、こうした生業の複合について紹介した。

「農業の道具」のコーナーは、小牛田農林高等学校に付属していた齋藤報恩会農業記念館旧蔵の農具類を展示した。同記念館による農具の収集は昭和30年代に行われ、その時期以前に使われていた資料が中心となるコレクションである。そこには、農具の改良の変遷や地域差を示す資料が含まれており、展示でもこうした「一見同じ資料だがよくみると違いがある」資料を展示することに主眼をおいた。

最後の「手作りの道具」は、タケやワラなどの自然素材を使って作った道具を紹介するコーナーである。ここでは、竹細工の編み目の違いや、ワラから作られる様々な形態を紹介することで、道具の多様性を見てもらおうとするものである。

以上の3コーナーを通して、一見、その使い方がわかる道具の微細な違いとその理由や、わかるようでわからない道具の位置づけ等を紹介するように心がけた。

こうした展示の理解を図るため、展示では自由導線を導入し、個別の資料を単体で見られるように工夫した。そのため、図のような「展示のみかた」と題した自主製作のリーフレットを来館者に配布した。このほか、以下のような関連事業を展開した。

まず、小学校4年生の単元「昔の暮らし」に対応するように指導案を作成し、県内全小学校に配布した(4-(2))。次に資料をよく見て頂くために、「これは何でしょうか」「どうやって使ったのでしょうか」という2種のアンケート用紙を配布した(4-(3))。最後は、毎週日曜日に関連行事として、江



Fig4-1-3 資料に見入る子どもたち

戸時代終わりから明治時代にかけての稲の脱穀調整体験を実施した。この体験事業は特別展を見学した小学校に対しても実施した(4-(4))。こうした活動を通じて、学校教育とリンクさせつつ、見学や体験を通して展示をより多面的に見てもらおうように心がけた。

キャプションの見かた

資料の名前です。カタカナで書いている資料は使っていた場所での呼び名をさします。

ここにスタンプが押してある資料は皆さまにぜひ情報をいただきたい資料です。

資料番号です。この順番にみていただけます、学芸員おすすめの順にごらんいただけます。

特別展 ちよつと音のくらしの見かた

てんじ 展示の見かた

- この展覧会には順路がありません。自由に、気になった資料をごらんください。
- この展覧会では、みなさんからの情報を反映させて展示をつくっていきます。皆さまの情報、体験、思い出などを同封の質問票に回答を書き入れてみてください。
- 資料の解説には、ちょっとしたクイズ形式の説明が入ったものがあります。道具の使い方を考えてみてください。

それでは展覧会をお楽しみください。

スタンプの種類

これはなにでしょうか?
このスタンプは、使い方や資料の名前がわからないものになります。お使いになった経験がおありの方、見たことがある方、お教えいただければと思います。

どうやって使ったのでしょうか?
このスタンプは、わかるようで、ちょっと不思議な使い方をするような道具につけてあります。クイズに答えるような気持ちで、使い方を想像してみてください。答えは、出入り口にあります。

NEW!
このスタンプは、皆さまにいただいた回答をもとに、作り直したキャプションにつけてあります。ぜひ情報をお寄せください。

うちがわ 展示室の内側

手製の道具
ちょっと昔の道具は一つ一つ手で作り上げるものでした。人びとが自ら作ることもあれば、近所の器用な人に頼んだり、職人に作ってもらうもの、町場で開かれる市で買い求めるものなどいろいろありました。こうした道具は徐々に工業製品に取って代われ、姿を消しつつあります。

ある家に伝わる道具

ここでは、南三陸町戸倉波伝谷にある家、屋号高屋敷に伝わる道具を紹介します。高屋敷は波伝谷集落でも古い家の一つとされ、明治時代以降は養蚕を中心に農業や漁業を行ってきました。この家に伝わる道具にはどのようなものがあるのでしょうか?

農業の道具
現在、農業には多くの機械が使われていますが、ほんの少し前まで手作業で行われてきました。その中には鋳や鎌など1500年以上、ほとんど形を変えずに使われてきたものもあります。その中でも、徐々に道具には改良が加えられ、より使いやすいような形になってきました。一見同じような道具ですが、並んでいる道具はどこが違うのでしょうか?

今回の展示は3つのコーナーからなっています。
展示室に入ると、三つの方向に分かれています。
どうぞ、気になるテーマからご覧ください。

Fig4-1-4 リーフレット (配布時はA5版4ページである)

(2) 学校向け指導案

＜指導案の作成にあたって＞

平成19年度特別展「ちょっと昔の暮らし」(平成19年10月13日～12月2日)の開催にあたり、県内の小学校に展示室の見学や体験を中心とした学習活動(授業)を提案した。当館では、博学連携事業の重要性を受けて、見学活動の支援や出前講座、資料の貸出など、今までも様々な取り組みをしてきたが、今回の提案を始めとしてこれからも博物館利用の新しい在り方を積極的に追求していきたい。

今回の特別展と関連行事から考えられる授業としては、

◇第4学年「きょうどに伝わるねがい」から「昔の暮らし」

◇第5学年「わたしたちの生活と食料生産」から「日本の農業(米作りの工夫と努力)」

◇第6学年「日本の歴史」から「近世～昭和30年代の人々の暮らし」

などが上げられたが、農業が機械化するまで使っていた農具を多数展示し、またそれらを実際に使った農作業体験ができるということから、第4学年「きょうどに伝わるねがい」から「昔の暮らし」に焦点を当てて学習指導案を作成、県内の国公私立小学校全ての4学年担任の先生方へ配布した。

＜第4学年社会科学学習指導案＞

小単元名	むかしの暮らし		
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ・昔と今の道具の違いから、昔と今とは人々の暮らしの様子が変化していることを理解する。 ・古い道具の様子や使い方を調べ、当時の人々が工夫や努力をしながら生活の向上を願ってきたことを考える。 		
配当時間	8時間	実施時期	10～11月
段階	学 習 活 動		
ふれる	1 昔の暮らしについて聞いてみよう(2時間) (1)身の回りの古い道具について調べたことを発表する。 (2)おじいさんやおばあさんから古い道具の使い方や昔の生活の様子を聞く。		
たてる	2 学習問題をつくり、学習計画を立てよう(1時間) (1)学習問題をつくる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">道具の変化で、人々の暮らしはどのように変わってきたのだろう。</div> (2)調査対象を決めて、昔の暮らしを調べる計画を立てる。 ※		
調べる (本時)	3 博物館に行って古い道具を調べたり、体験してみよう(3時間) (1)古い道具の使い方やその当時の暮らしを調べる。 (2)古い道具を体験し、昔の人々の工夫や努力に気づく。		
考える	4 調べたり考えたりしたことをまとめよう(1時間) ○調べて分かったことを絵カードや年表にまとめる。		
深める つなげる	5 昔と今の暮らしの変化を考えよう(1時間) (1)発表を聞き合い、道具の変化が人々の生活の変化と関係があったことに気づく。 (2)昔の人の努力や工夫をこれからの暮らしに生かすことができないか考える。		

※調査対象として考えられるもの(着る物、洗濯、遊び、明かり、米作り、台所、食事のしかた)

Fig4-2-1 指導案①

○本時

題材名	博物館に行こう		
目標	<ul style="list-style-type: none"> 古い道具やその使い方に関心を持ち、博物館の見学を通して具体的に調べることができる。 古い道具を実際に体験することで、道具の使い方を知り、昔の人々の苦労や工夫に気づく。 		
配当時間	3時間	実施時期	10月
段階	学習活動	留意点	場所
つかむ (10分)	1 本時の学習を確認する。 古い道具の様子や使い方を調べたり、実際に体験してみよう。	<ul style="list-style-type: none"> 前時を振り返り、見学のめあてを確認する。 博物館の施設の概要を知り、活動の場所を確認する。 グループ毎に行動すること、見学のマナーを守ることを伝える。 	研修室
調べる① (45分)	2 古い道具の使い方やその当時のくらしを調べる。 (1) 米をつくる道具の様子や使い方について調べる。 (2) ○○○の道具の様子や使い方について調べる。	<ul style="list-style-type: none"> 米をつくる道具については特別展「ちょっと昔のくらし」の見学、その他については総合展示室・今野家住宅の見学で調べ活動を行う。 学習(見学)カードを活用し、分からない項目については博物館の職員に聞いたり、自分の予想を書くように助言する。 	特別展示室 総合展示室 今野家住宅
調べる② (45分)	3 古い道具を体験し、昔の人々の苦労や工夫に気づく。 <体験できるもの> ① 縄ない(ワラたたき)→注連縄 ② 石臼→黄粉、米粉 ③ 脱穀、唐箕・箕→ソバの実・粳 ④ 粳つき、唐箕・箕→玄米 <体験時間> ①-30分 ②-ひとり2分程度 ③-ひとり6分程度 ④-ひとり6分程度	<ul style="list-style-type: none"> 体験の内容については事前に博物館と打ち合わせをし、充実したものにする。 体験の内容や人数によっては、ひとり当たりの時間が多かたり少なかたりするので、グループ別に他の活動(2の調べ学習など)とローテーションするのも効果的。 材料については自分たちで収穫した農産物を持参していただいても可。 	研修室 ピロティ 今野家住宅の庭など
まとめる (30分)	4 調べたことをまとめたり、体験した感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> 2と3の活動のまとめの時間とする。場合によっては、各展示室や図書情報室などで補足の調べ学習をさせる。 	研修室 各展示室 図書情報室
つなげる (5分)	5 次時の学習を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 次時は、今まで調べてみて分かったことや考えたことを絵カードや年表にまとめる活動であることを知らせる。 	研修室

Fig4-2-2 指導案②

(3) 情報募集

特別展「ちょっと昔の暮らし」においては、来館者から情報の募集を行った。この展示会は昭和30年代から40年代の暮らしの様子に主眼をおいた展示であるが、この時期の資料についてはまだ体系だった研究の深化がみられず、多くの場合学芸員の経験に基づいた構成がなされることが多い状況にある。一方で、既に50年近い年月が過ぎ、現在では使われなくなった道具も多々ある。筆者もある程度推定はできるが、使用法等が不明な道具も多数ある。その扱いについて、展示をしないという点も含め検討したが、逆に来館者に教えていただく、という趣旨で回答カードを設けた。「これは何でしょうか」と銘打った質問は、資料の解説キャプションに資料名などから類推する質問を書き、来館者に回答を記入していただく形を採った。

また、実際に使用していた方々の回答のみならず、資料を見ていただくことでその使い方や特徴を見いだしてもらうように「どうやって使ったのでしょうか」というクイズ形式の質問も別途用意した。「どうやって使ったのでしょうか」については、回答者を小学校中学年程度に設定した。

民俗資料の多くは「転用」といって、当初の使い方が徐々に変化し、違った使い方がされるようになる道具が多々あるが、「これは何でしょうか」の回答でも9割近くが一つの使い方を記す中で、異なる回答を記す実際に使用した人があるなど、道具の使い方に対して多様性があることが示された。この点で「どうやって使ったのでしょうか」に対しても、解答編をファイルにして出口で閲覧できるようにしたが、道具から使い方を想像するという点により、別の使い方を見いだす、という面を引き出そうと試みたものでもあった。学芸員が行う展示解説では、その旨を伝えて様々な回答が寄せられるように心がけた。

こうした試みは当館の展示では初めてであったが、「どうやって使ったのでしょうか」に対する子どもたちの反応は良好で、多くの解答が寄せられた。また、「これは何でしょうか」に対しても、「どうやって使ったのでしょうか」と同様に子どもたちの解答が寄せられると共に、実際に使っていた人、さらには使っていた人の孫が記入するという例もあった。その結果、カードへの回答総数は2000枚近くとなり、企画としては成功したものと考えている。

以下、解答として寄せられたもののうち、いくつかの資料に対する代表的な回答を掲載する。「これは何でしょうか」の回答例としたのは、資料名、使用法が不明な資料である。これについては多くの回答が寄せられ、家畜のえさを砕く道具という使用法はほぼ会期中に判明したが、そのほかにも別の使い方を指摘されるなど、多くの使い方が寄せられた。「どうやって使ったのでしょうか」では、背負い梯子とも呼ばれる運搬具の名前の由来を尋ねた質問に対する回答である。子どもたちが様々な使い方を考えていることがわかる。

このように、一つの資料に対して多様な回答が寄せられる結果となった。また、これを「回答コーナー」というかたちで展示室内に張り出したことにより、多くの来館者に他の人の回答を熱心に読んでいただくなど、展示を補完する効果があったものとみられる。

展示室にいと、この試みの影響か、見学中のお年寄りが小学生に道具の



Fig4-3-1 回答コーナー



Fig4-3-2 張り出された回答



Fig4-3-3 回答コーナーを見入る子ども



Fig4-3-4 「これは何でしょうか」の回答例「不明」資料

使い方を解説したり、お年寄り同士、小学生同士が資料の使い方について議論する姿を散見するなど、単に展示の解説を読み、資料を見るだけではない、新たな資料の見方を提示する方法であったと考える。

Tbl4-3-1 質問への回答例

「これは何でしょうか」回答例

回答日	資料名	内容	ひとこと	年齢	性別
2007年10月14日	不明	名前、チョッパー。展示品の上に直角に木を付け、家畜の餌（トウモロコシ、にんじん等）を小さくする道具でした。	やはり棒をつけるのですね。御年齢から推察するにお使いになったのでしょうか。また、家畜は牛、馬ですか、豚などでしょうか？	60	女
2007年10月19日	不明	とうふを四等分にする道具だと思います。	あ、きれいに四等分にできそうですね。	9	男
2007年10月25日	不明	かで切り、牛の餌にカブ、大根など食べるのに大きすぎるものを切るのに使いました。展示品は長い柄が欠失しています。かで切りの刃の部分です。	かで切りというのですか。柄はどのくらいの長さだったのでしょうか？	65	男
2007年11月11日	不明	母がいていたのですが、これは竹を割る際につかうのではないのでしょうか（私もそう思います）	実は、そういう使い方をした、という話を別な方からも伺いました。	12	女
2007年11月13日	不明	クロスになっているとがっている部分を火であつくして、木にはんこをつけたりするもの	焼き印ですね。十字になりますから、そういう使い方できます	9	男
2007年11月21日	不明	ばってんになっているところをさかさまにして、まめとかをすりつぶしていたと思う。	確かに、そういう使い方でもできそうですね。		
2007年11月24日	不明	「イモキザミ」だそうです。家畜の餌の芋や大根などを細かく刻むのに使ったそうです。（83歳のおじいちゃんが云っていました）	おじいさんに聞いて頂いたのですね。ありがとうございます。イモキザミというのですね。	27	女

「どうやって使ったのでしょうか」回答例

回答日	資料名	内容	ひとこと	年齢	性別
2007年10月16日	やせ馬	やせた馬が力をつけられるように。	おもりを付けて背負わせ、トレーニングしたのでしょうかね。けっこう荷物が付けられるので、きたえられたかもしれませんね。	10	女
2007年10月17日	やせ馬	やせてる馬にしかつけられないからやせ馬	う～ん、となると太った馬用のものもあったのですかね^^		
2007年10月19日	やせ馬	はしごみたいに使ったと思う。	そう、はしごみたいですよ。なので、この道具の名前を背負いはしご（しよいばしご）と呼んでいる地域もあります。	10	女
2007年10月30日	やせ馬	形がやせた馬みたいだから	確かに、なんかやせ細った馬のような形をしていますね。	9	女
2007年11月2日	やせ馬	にもつをおいて馬がひっぱる？	そりみたいな使い方かな？それだと、すぐこわれちゃいそうです	11	男
2007年11月13日	やせ馬	形がやせた馬みたいだから	たしかに足が4本あるようにもみえますね。	9	男
2007年11月21日	やせ馬	馬に乗せるときに、たまたまその馬がやせていたから？	なかなか、おもしろいアイデアだと思います。たまたまだと、いろいろところで同じ名前で行っているのとむじゅんしますね。	9	女

(4) 体験活動について

<活動の内容>

特別展「ちょっと昔の暮らし」の関連行事として、農作業体験を会期中の毎週日曜日に開催したが、学校の授業として来館する子どもたちにも同じ内容で体験をさせた。活動の内容としては、農作業が機械化されるまで使っていた農具を利用し、米の脱穀、粳摺り、精米、米粉作りの各作業を行った。体験を通して、展示でみた昔の道具が実際にどのようにして使われていたのかを具体的に理解させるねらいがあった。

<活動の様子>

各体験とも当日引率する先生方と事前に打ち合わせ（内容・人数・時間等）を行うことで綿密な計画を立てることができた。また、下見に来ていただいた先生も多く、体験活動のイメージをしっかりとち、充実した取り組みをしていた。

最終的に、県内11校の4年生が来館し、特別展「ちょっと昔の暮らし」を見学後に体験活動を行った（大崎市＝4校、仙台市＝3校、仙台管内＝3校、大河原管内＝1校）。前述した指導案（4－（2））を見ての問い合わせは他にもあったが、学校のカリキュラムと時期が合わず来館を見送った学校もあり、広報の在り方・時期についての課題が残った。

当日は、当館のボランティアの方に体験補助をお願いして、クラス単位、グループ単位で活動を行った。活動は、主に今野家住宅の庭で行ったが、雨の場合は今野家住宅のコマヤと土間、縁側で行い、各作業を子どもたちがローテーションする形をとった。

<体験活動をした小学校>

この日は仙台市内の小学校4年生が博物館での授業を楽しんだ。

特別展見学の後、学年を2つに分け、米の脱穀から米粉作りまでの作業を全員が時間をかけてじっくり体験した。見学だけではわからない米づくりの苦労や工夫を実感することができたようだった。

平成19年10月19日（金）

バス 仙台市立〇〇小学校4年生 86名

	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30
Aグループ	特別展見学	体験活動	今野家見学	シアター	ワークテーブル	昼食（研修室）	
Bグループ	特別展見学	今野家見学	体験活動	ワークテーブル	シアター	昼食（研修室）	

※シアターとワークテーブルは、3階「こども歴史館」で常時活動できるもの

Fig4-4-2 博物館利用モデル



Fig4-4-1 活動の様子



Fig4-4-2 【米の脱穀体験】
千歯こきもなかなか力がいらいます



Fig4-4-3 【籾落とし体験】
打ち棒で穂から籾を落とします



Fig4-4-4 【籾摺り体験】
木臼と横杵を使って玄米と籾殻に分けます



Fig4-4-5 【箕の体験】
箕を上下に動かして籾殻を飛ばし、玄米を残します



Fig4-4-6 【精米体験】
玄米を一升瓶に入れ、木の棒で突いて精米します



Fig4-4-7 【米粉づくり】
精米した米を石臼で挽いて粉にします

<体験した子どもの感想>

ふだん食べているお米がどうやってできるのか分かりました。今は機械であつという間にできるけど、昔は一つ一つ手作業でやってたのでたいへんだったんだなあと思いました。特にみ(箕)の使い方がむずかしかったです。

「博学連携事業化報告書」

発行日 2008年3月21日

編集・発行 東北歴史博物館

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1-22-1

Tel.(022)368-0101 (代)

<http://www.thm.pref.miyagi.jp>

印刷 今野印刷株式会社

〒984-0011 宮城県仙台市若林区六丁の目西町 2-10

Tel.(022)288-6123
